

編集室から

今月の表紙は、3月14日に廃止となるトワイライトエクスプレスに昨年乗車した際のもので。この時も奇跡的に数日前に予約が取れましたが、当日は大雪で接続列車が軒並み運休したにもかかわらず、僕が乗った寝台列車だけは1時間程度遅れたものの、無事札幌まで到着しました。このため、食堂車の予約にもキャンセルができ、予約できなかったのにフルコースを頂くことができるという幸運にも巡りあいました。



ただ、同様に廃止となる寝台特急の北斗星とカシオペアには乗れていませんでした。

こちらは上野駅から出るだけに余計に予約が取れない!と思いきや、これまた奇跡的にカシオペアの寝台が取れ、過日堪能して参りました!



これら大人気の寝台列車が何れも廃止されるのは、青函トンネルでの新幹線工事が佳境に入ることが原因の一つです。ですが、それだけだと工事後に復活となるはずなのですが、事情は簡単ではありません。

新幹線が通ることによってトンネル内の電圧が上げられるため、青函トンネルを走行する機関車の新調が必要なのです。この負担をJR北海道が嫌い、折角毎年数十億円の収入源となっている列車が全て廃止の憂き目に遭うという結果となりました。巨費を投じて超豪華寝台列車を新造し大好評を博しているJR九州とは真逆の対応です。ビジネスにおいて、継続的な投資を行わず緊縮していくと事業規模が減退します。適切な投資を持続させることこそ経営のツボですが、これを知らない経営者がいるようです。(は)



Chintara

日本酒バルChintara
03-6427-8183
17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休
渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。
上京された際、ご利用になっ
てみてください。
もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2015/02

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2015/02

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

如月



廃止間近の寝台特急
トワイライトエクスプレス
札幌駅にて
by hama

濱のつばやき 『国の未来』

ある仕事の関係で、雪深い温泉旅館に泊まった。そこは、山奥の川沿いにある比較的小さな温泉。宿は温泉街最大の客室数を誇るホテルY。ところが経営難で地域外資本の傘下に入り、食事は朝夕バイキング形式の廉価な宿として再スタートしている。

三棟の館は六階建て。宴会場は大中小すべての大きさが備わっているが、一部しか使われること無く佇んでいる。一人だったので、小ぢんまりとした部屋をあてがわれた。設備的には極めて普通の煙草臭が鼻を突く、うらびれたしつらえ。

その中で、畳は新調され、トイレも温水洗浄便座に改装されていた。露天風呂も、泉質も申し分ない。

今年の雪はやや少ないと聞いていたが、それでも路肩は人の背丈を越えて積み上げられている。夕刻から朝方に掛けて小粒だが、ひらひらと舞うように雪が降り続いていた。

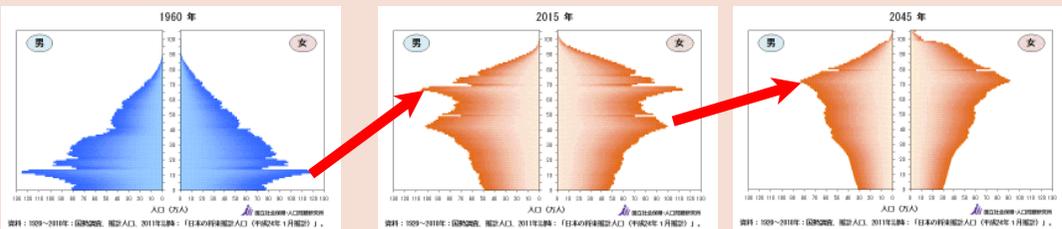
身売りしなければならなくなった、草臥れた旅館の窓から眺めた朝の雪景色は、見事だった。

パブルが崩壊し、大災害を経て、地方の中小温泉街はどこも厳しいと聞く。当地も例外ではなかった。特に、この館のように、容易に経営の舵を切れない中途半端に規模の大きい旅館が、最も経営的に厳しい。

今、この国が置かれた状況を、この宿は象徴しているかのようだった。

図は、国立社会保障・人口問題研究所が公表している日本の人口推移と将来推計を人口ピラミッドとして表したものだ。戦前見事な三角ピラミッド型をしていたこの国の人口分布は戦後、大きく様相を変えた。図で横向きの棒グラフが突出している世代は、団塊の世代と、そのジュニア世代。それ以外の若い世代は徐々に人口を減らしている。このまま時間だけが過ぎればどうなるのか。団塊の世代が高齢化して姿を消す頃、つまりジュニア世代が高齢者となる時期、推計は冷徹な未来を語る。人口が増える世代が全く無い急速な人口減少。

それが何をもたらすのか。日本政策投資銀行の特別顧問である藻谷浩介氏による「デフレの正体」に詳しい。結論を示せば、国内経済の縮小だ。ただそれは、単に縮小するというレベルではないだろう。国内経済の規模は人口に比例するから、現在の経済規模と比較すると、ほとんど崩壊に近いと予想される。



この事態が訪れるまで、およそ三十年。今年誕生した子供が三十路になる頃には、結果が出ているという速度だ。

一人の女性が生涯に産む子供の平均を合計特殊出生率という。この値が一〇八を上回らないと人口は維持できない。が、未婚者が増え、子供を設けない夫婦が増えている現状で、この数値を増加させるのは容易ではない。

昨年十一月号の本欄でも紹介した「老後破産」。就職難に加えて、派遣労働などの制度によって賃金は下がる一方で、じつと我慢して働き続けたとしても月収十数万円を突破する希望が持てない若者たち。

加えて、見通しの見えない社会保険、増える一方の税・医療費などの負担…。

これらを考えると、手元の資源で細々と食いつなぎ、衰退死を座して待つしかない彼の宿を看る想いがする。

世界最長の歴史ある国としてギネスにも載る二千年続いたこの国が、国ごと消滅しそうなこの状況に對して本当になす術は無いのか。

その答えは、実は「北陸に在る」と考えている。さまざまな機関が提唱している豊かさランキングで全国トップとされている北陸に。

地域別に見ると、北陸地方と東北地方は、祖父母とその子・孫など複数世代が同居する多世代同居世帯が多い。一方で世帯収入は北陸の方が多い。その原因を調査分析した研究がある。それによると、両地域の違いは女性の就業率だという。多世代が同居しつつも、男だけが働き、女性が複数世代で家を守っている形が多い東北に對し、北陸は働ける世代は全員稼ぎ、一番上の世代（曾祖父母・祖父母）が一番下の世代（ひ孫・孫）の子育てをするという世帯様式の違い、と調査結果はいう。また両地方では兼業農家・自給農家も多い。これらの農家は米という基本食糧を自給できるため、給与所得の可処分割合が高くなる。つまり、お金を貯めたり使ったりする自由度がさらに大きくなる。

加えて、核家族世帯に比べ、多世代同居世帯は、家族で子育てをするため、子供を安心して産み育てやすい。人口減少の国内経済縮小であり、それが国民の人生の未来をも左右する。であれば迅速な人口増加政策が発動されねば、この国を護ることもできない。そして答えは二十年以内に現実となって現れる。

この状況を打破する鍵は、「核家族から多世代同居へ・女性就業率の向上」だろう。

国家とは何か？最も判りやすい例えは「船」であろう。日本人は元より、日本に住む外国人も含め、この国に暮らす民は、日本という船に同乗している仲間である。その船が沈まぬよう、或いはより善き船となるよう、共に歩を同じくしなければならぬのではないか。

今、生きている我々自身が、自らの生き方を変え始めなければ、日本という土台が立ち消えてしまいかも知れない危機が、思わぬ方向から音を立てずに近づいている。

今回は、山下祐介著『地方消滅の罨』（2014年12月10日、筑摩書房）について述べてみたい。山下（首都大学東京：准教授）は2011年3月まで弘前大学人文学部に在職され、青森県の過疎地域を中心として精力的にフィールドワークをされ、東日本大震災後も積極的に被災地に入り支援と発言を続けてきた社会学者（地域社会学、環境社会学）である。なお、きただより54（2012年10月号）において、山下の著書である『限界集落の真実』（2012年1月10日、筑摩書房）について紹介している。

副題にもある昨年5月に発表された「増田レポート」は、厚生労働省社会保障・人口問題研究所の人口の将来予測とはまた異なり、人口の再生産の可能性として特に20～39歳の女性がどれだけ市区町村に残っているのかという点をクローズアップし、「2040年までに全国の市町村の半数が消滅する可能性がある」と打ち出した。秋田県は25市町村のうち10町村が消え、将来的に八郎潟干拓で誕生した大潟村以外が消滅するとされた。秋田県人口のピークは1955（昭和30）年であり、以後、減り続け、地方の時代と騒がれた三全総の1980年（昭和55）でさえも微増にとどまった。毎年、県人口が1万人以上減少し、近年は人口減少率の幅も大きくなっており、人口減少報道に慣れている秋田県ではあるが、さすがに増田レポートは衝撃的なニュースであった。私の感覚でしかないが、県や市町村において人口減少に関する急ごしらえの庁内プロジェクトチーム立ち上げのような記事が一段と多くなったように感じていた。

人口減少は今に始まったことではないのだが、マスコミ等の過剰な取り上げ方なのか、山下は「地方消滅は避けられない」という暗黙の空気のようなものが作られ、意図的にそういう方向に導こうとしているのではないかと、増田レポートの警鐘にこそ、地方を消滅へと導く罨が潜んでいるとし、そこには、地域の解消を導きうる「選択と集中」の論理が現れているからだと述べている。

確かに増田レポートによる人口分析・予測や更なる東京一極集中による「極点社会の到来」などは、人口減少問題を「あるのにな」と先送りしてきた状況にしっかり「ある」と訴えた意味は大きいですが、私も、増田レポートが公表されて以来の人口減少問題に対する様々な動きに何か違和感を持っていた。

山下は増田レポートの波紋の大きさに対する強い危機感から急遽、本書を書き下ろしたとのことである。書店に行くと、本書と増田レポートの『地方消滅』が並べて積まれてあるが、両書を合わせて読まれることをお勧めしたい。

日本創成会議の増田レポート、増田寛也編著（2014年8月）『地方消滅～東京一極集中が招く人口急減』、中央公論新社
注）敬称略

NHKのズームアップ現代や首都圏の深夜に放送されているWBS(ワールドビジネスサテライト)で、今年になってからよく見かけるテーマが「地域で起業する時代」という言葉です。まあ、安倍政権のひとつの大きなテーマでもありますし、そこに石破さんをあてるわけですし、それなりに予算もつけているので穿った見方をすればプロパガンダ的にメディア操作もする可能性もあるのでしょうか。

さて地域起業家とはどういう方を指すのでしょうか？「ある特定の地域で、その特有資源を活用して収益事業を起こし、新たに雇用を創出する人」と私は考えています。少し前に流行した(?)“コミュニティビジネス・社会起業家”と似ているようですが、目的のスタート位置が違うのかもしれない。

地域起業家=目的はあくまでもビジネスでの成功であり、その資源として特定地域の資源を活用

コミュニティビジネス・社会起業家=目的は社会・地域の問題解決であり、手段としてビジネスというスキームを使うこと

結果としては地域に雇用を創出するという点では同じなので、ニワトリ・卵の話かも知れませんが、正々堂々と地域つまりは田舎で儲かるビジネスをするんだ!という風潮になってきたのは喜ばしいことです。

石川県・北陸に目を向けてみれば来月3月には北陸新幹線も開通し東京-金沢間が2時間30分で結ばれます。となると、交流人口が増加するので、観光だけではなく、生活、ビジネスの場としての石川県・北陸に可能性を見出す方もたくさんいらっしゃるかもしれません。

私も石川県と大都市圏をつなげる事業をしていますが、地域資源を活用した商売でつくづく思うのが、従来のマーケティングの基本と言われる“マーケットインの思想では商売にならない”という事です。「市場の欲求・要求を反映した商品づくり」という事なのですが、市場の要求といった顕在化されてしまっている現象に対する商売は、既存商品からのリプレイス・安定調達・競争戦略というのが前提であり、最終的には価格競争に陥り、規模の経済性を持つところが優位性を持つという結論に達する事が多々あります。大企業の商売では、細かな要求に対して商品を改善し、シェア競争で優位に立つという点で効果がある手法です。しかし、生産規模、資金規模が総じて脆弱な地域企業にとってはそうではありません。地域資源を使った商売としては「真似のできない商材を生み出し、市場を新たに創造する」という考え方が向いていると思われれます。大資本では商売にならないような小さな市場を数多く作り出すのです。例えば飲食店業界で言う、『地域特化型店舗』がその典型だと思います。大資本の仕入れ・流通構造はシステムティックすぎて複雑な仕入れ先などは逆に損益分岐点に満たない事も考えられます。またそれだけの大規模に安定調達できる供給先も地方には存在しませんので。

地域の問題を解決しようなんていう小さな枠にとらわれず、その資源を使ってどれだけ儲けてやろうか!!と考える人が多くなればよりよい日本になると信じてます。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

静岡県小山町経済建設部専門監 溝口 久

外に出ると仕事が終わった多くの人で街は賑わっていた。日が落ちるのは21時頃、ふんだんにある公園で帰宅前のひとときを楽しむ人を多く目にする。いずれの公園も美しい。偉人の像もいたるところで見かける。ベンチも子供向けの遊具も多い。小生が勤務する小山町にある金太郎ゆかりの金時公園のリニューアルの参考にするために写真を多数撮らしていただいた。車道に目をやると車が多い。汚れている車が多いが、高級車が多数走っている。オルガの父の車もレクサスとのこと。店から出てきて驚いたことがある。ロシア滞在中は雨が降りだしそうなどんよりとした日が続き、この日も雲が立ち込めていた。道路に雨の降ったあとがある、しかも相当量の。でも歩道は乾いている。オルガに訊くと散水車が出るとのこと。結構頻繁に車道が洗われているようだ。

今晚はウクライナ料理店に入った。毎度のごとく、飲み物のみ決めて料理の選択は長女らに任せる。鮭料理を頼んだら、無いと言う、ちょう鮫のムニエル的料理は如何と言う。卵のキャビアではなくてあくまでも身だ。ま、食べたことないから良からう。出てきた料理には黒のキャビアは添えられていなかったけど赤いイクラが散りばめてあった。淡白な美味であった。

小生の旅は残り二日となった、ポリショイはじめモスクワには劇場が多い。本格的なバレエを見ることはできないだろうかと、オルガに相談すると、苦勞の末見つけ出してくれた。7-8月は劇場ものはオフシーズンで殆どやっていないのだ。チャイコフスキー記念コンサートホールでモダンバレエがあることがわかり、前日に残りわずかになったチケットを窓口で



手に入れた。2100ルーブルであった。バレエを観る前に「地球の歩き方」に紹介されているチェコ料理のレストランに入った。チェコビールに惹かれたのだが、味は別にどうってことはない。料理が不味い、ビールをたくさん飲ませるためか、味付けがしょっぱい。肉もたいしたことはない。この旅行の最後の夜の料理にしてはあまりに悲しかった。ロンドンとチェコの料理はどうもお薦めできない。気を取り直して、ホールに入った。

手に入れた席は三階隅でありあまりよく見えないだろうと覚悟を決めていた。ところが円形状かつ勾配のある座席の並びに相当舞台が近くに見え満足した。オーケストラも目に入るいい席であった。

18:45開場19:00スタートだった。現代にアレンジされた衣装を身にまとい、オーケストラに合わせ軽快に踊りが続く。多数の男女のバレエダンサーの見事なコンビネーションは満席のお客を惹き付けた。

余興的に演じられたモンゴルの一人相撲は実に巧みだった。足払いに投げ技、舞台から落ちかけたりで、二人で相撲をとっているに違いないと思わせる見事な演技だった。個々のプログラムが終わることにダンサーには花がファンからプレゼントされた。

中に休憩を20分ほど挟み、終わりは21時を回っていた。舞台のあとは、ちょっと一息、劇場そばにある北京ホテルの屋上テラスに登り、モスクワの夜景を楽しんだ。教会のライトアップもいいが、ビル壁面の揺らぐ光のアートはこれまで目にしたことのないものだった。

市内の移動は地下鉄を使った。20回の回数券を買って長女と使った。距離は関係なく乗った回数なので、乗車時に改札口にカードをかざし、ゲートが空いたところで長女が手を伸ばし渡されたカードで自分も改札口を通りすぎた。列車を待つことは殆どない。東京の地下鉄など目ではない頻度だ。この日も地下鉄を乗り継いでホテルへ帰ったのだが、駅からはホテルとは反対方向に歩いてしまい、やっとの思いでホテルに着いた頃には24時近くになっていた。(つづく)

